



このアメーシング・アニメーションは、3つのエピソードでオムニバス構成されています。

私たちは、その事実を自覚的に捉えようという限り、無視したり、無関心であったり、あるいは関わり合いたくないと回避することによって、

自らの差別性に気がつかずに、無責任な加害者になっていることがあります。私たちが友情や愛情の関わりの中で、

差別と直面したとき、どうするのか、という問いかけを映画化したものです。

差別について考える出発点として、あなたは、どう受け取ってくださいますか？



同和问题啓発映画 アメーシング・アニメーション 42分

Cherryblossom

チェリーブラッサム

桜の木の下に、
いったい何が埋められたの？
意識しないでおこうなんて、
本当にできるの？
私の何を、
切り離して考えるって言うの？

声の出演

同村かおり 藤枝成子 山内健一 井上和彦
内田 偶 永井希子 松下智美 佐久間レイ
野川真紀子 今井有紀子 坂田 健一 小杉十郎太
かおりの父 田原アルノ 健一の父 藤本 譲
かおりの母 達 依久子 健一の母 山田礼子
先生 掛川裕彦
孫 林 玉緒
老人 石森達幸

スタッフ

プロデューサー 多比良建夫
脚本 にしはむよしこ
監督 平田敏夫
監修 さかいあさお
キャラクター・デザイン 岡田敏晴
作画監督 吉崎 誠
撮影監督 渡辺由利夫
音楽 手塚 理

企画

松永夏代子 「なみだ星」

企画

大阪同和问题映像啓発推進協議会
大阪府・大阪府下市町村
大阪府教育委員会
大阪府下市町村教育委員会

協力

財大阪府同和事業促進協議会

後援

総務庁長官官房地域改善対策室

制作

株式会社ブロックス大阪支社

制作協力

株旭プロダクション

完成

1992年10月30日 © 7101

■プロローグ

ある町の墓地の近くに、大きな桜の木がありました。いつ頃のことでしょう。この桜の木の下に、幾人かの人々が何かを埋めていたのです。

■分身

中学3年生の内田 優と岡村かおりは親友です。でもかおりは、優が同和地区出身であることを真剣に考えたことはありません。

新学期が始まったある日、教室でクラスメートの野川真紀子が、島崎藤村の小説「破戒」を読んでいるところへかおりと優がやってきます。小説のことを無邪気にたずねるかおりを制止して、真紀子は優から「破戒」を隠してしまいます。

放課後、かおりは真紀子に呼び出されて、無神経さをとがめられます。「破戒」には部落の人々にとって随分ひどいことが書いてあるのだから、そんな本を優に見せる訳にはいかない、と言うのです。

かおりは、仲良しの優が同和地区出身であることを、はじめて意識します。また、真紀子は「優に同和地区の話をすると優が傷つくし、優が傷つくとことは、差別したことになるのだから、このままそっとしておいて意識しないでおこう。」と忠告します。しかし、一度意識してしまったかおりには、もはやこの事実を無視することができません。

花が散りはじめた大きな桜の木の下にたまたま、かおりはすっかり落ち込んでしまいます。すると突然「優との友達をやめたら？」という声がして、目の前にかおりとそっくりの女の子が現れます。それは悩む心が生んだ、かおりの分身だったのです。この分身はとてども意地悪く、「僕は友達だし、同和地区も部落差別も関係ない。」と意識しなさいとすればするほど、かおりの一挙一動に本音をぶつけて、混乱させてしまっていました。そんなかおりと優の関係は、しだいにおかしくなっていくのです。

ある日、新緑になった大きな桜の木の下で、かおりは優に問い詰められます。

「あとつきあいてくれないならそれでもいいわ。でもかおり、何があったの？」

ここで初めて、かおりは優に心を開いて、自分の分身に苦しめられていることを話します。そして、同和地区のことを気にしたために優を傷つけるのではないかと、差別につながるのではないかと、余計に意識して優と話さなくなったことを告白します。すると優は、「私は、同和地区の出身だってことを、隠してはいないわ。かおりと真紀子が何を気にしているのか、同和地区についてどう思っているのか、『破戒』のことだって、一緒に話をしてみたいわよ。」と言い、何も話さずに、同和地区のことをただ避けているだけでは、結局、優を避けていることにほかならないことを示唆します。

かおりは、やっと、優を避けていたことを思い知るのです。かおりは、さっそく真紀子も交えてこの問題について3人で話し合うことを決意します。優と意気の疎通ができたかおりの前から、分身は消えています。消えようとする分身を掴もうとしたかおりの手の中に、季節外れの桜の花びらが残っていました。

■愛身

恋人同士の山内健一と松下智美がパーティに向かう道すがら、ふざけ合う中学生のかおりと優にすれ違います。健一はつぶやきます。「あの年頃が一番いい、悩みなんかなくて…」

パーティは、健一の友人、坂田が密かに仕組んだ二人の結婚パーティでした。智美と3年も付き合ってきた健一にとって、結婚を志すよい機会となりましたが、一方の智美には、割り切れない思いが残っていました。それは、健一が、智美が同和地区の出身であることを無視しようとして、「君は君、切り離して考えているんだ、僕は」と言っていることが、わだかまっていたからです。

会場で、健一は坂田に忠告を受けます。智美が同和地区出身であることを両親と話し合って理解してもらう必要があることを。しかし健一は、「結婚するのは僕たち二人、会社や家族と関係ない。」と親友の忠告を突っぱねてしまいます。

健一は、両親たちが同和問題に理解をもっていないため、必ずこの結婚に反対されることを苦にしています。また、今でもなお、世間では同和地区出身者との結婚に悪いイメージを抱いていることを気にしていました。だからこそ、結婚は二人だけのこと、同和地区も部落差別も切り離せないものかと思いついて悩んでいたのです。このことを考えると必ず、どこからか、カチャカチャという耳障りな音が健一を襲って悩ませるのです。そういう二人でしかた、たまたまデートしても、智美には、二人の心がしだいに離れていくように思えるのです。

夏の終わりに、深緑の桜の木の下に健一がいます。「智美と同和地区を、なぜ切り離して考えてくれないんだ？」そう思いつく健一。すると突然、稲妻とともに大粒の雨がふりだし、耳障りなカチャカチャの音が襲ってきます。

気がつく、健一は深い霧の中にいました。霧の中から、健一の父や母が現れ、目の前で突然怪物に変身します。怪物たちは健一に、「お前も仲間だったんだね。」と言います。すると健一の前に鏡が現れ、そこには怪物に変身した健一の姿が映っているではありませんか。驚く健一に怪物たちは口々に言います。「心の中までは、隠せないんだよ。」「お前も私たちと同じように智美さんが同和地区出身だってことを悩んでいたんだね。」「隠さなくていいよ。自分の本当の姿なんて、自分じゃわからないものよ。」それでも健一は、誰いのは世間とか、社会の方であって、自分ではないかと思っていましたから、「違う、僕はお前とは違うんだ…」と怪物たちに手を振り上げて向かっていきます。

振り下ろした手元から、鋭い悲鳴が聞こえます。よく見ると、傷つけられて痛々しい姿の智美がうずくまっています。驚いた健一は、智美を抱き起こそうと触れると、再び自分の鋭い手元で傷つてしまいます。いつの間にか、まわりに怪物が取り囲んでいて、口々に言います。「お前と智美さんが結婚するのは、所詮無理なんだ。」「智美さんを傷つけることしかできないじゃねえ。」そう言いつつ怪物たちは智美を運び出します。「どこへ連れていくんだ、待てくれえ。」追いかける健一の目の前で閉まる扉、その扉を何度もたたき続ける健一……

気がつく、雨上がりの大きな桜の木の下に、健一は倒れていました。痛むので自分の手のひらを見ると、傷がついていて血がにじんでいます。

昼下がりの公園で、健一は智美と坂田に夢魘の経緯を話しています。

「僕は智美と同和地区を切り離すことくらい簡単だと思っていた…結婚してうちの一人になれば、同和地区とは縁が切れる。ってぐらいいね。しかし、今は違う。なぜ、僕が怪物に変わったのか、分かったような気がして…世間や社会のせいにしていいけれど、実は僕自身が一番悪いにして、君を傷つけていたんだ。」

智美の瞳に涙がにじみます。坂田は言います。「立場を変えて考えてみよう。智美さんと同和地区を無理やり切り離そうと考えること自体がおかしいんじゃないか。」

こうして健一は、自分が智美の切っても切れない家族や友達を、一方的に捨てようとしたことの非を悟るのです。

■エピローグ

大きな桜の木の下に季節が巡っていきます。やがて春。いったい何が桜の木の下に埋められているのか、静かに語られます。それは、差別戒名が刻まれた墓石だったのです。死んでまで差別を受けるのはあまりにもつらからうと、この世に差別がなくなる日まで、墓石を埋めることになったのです。

ところが、幾人かの手で桜の木の下に墓石が掘り出されようとしています。決して、この世に差別がなくなった訳ではないのに……

やはり、ご先祖様と一緒にお花見をしたいという人々の願いで掘り出されようとしているのです。でも、こんなひどいことを今まで許してきたのは、いったい誰だと思いますか？

●お申し込み・お問い合わせは



【飲酒運転撲滅宣言企業】
有限会社 博映商事

TEL 092-741-0306 FAX 092-741-6628

T 810-0073 福岡市中央区舞鶴1-3-31-220

EHP http://zakuei-shoji.jp E-Mail info@zakuei-shoji.jp

